神戸新聞NEXT

2018/7/25 14:50　神戸新聞NEXT

播磨の祭り必需品「シデ棒」　雨もＯＫ、新調不要に“進化”

灘のけんか祭りで宮入りした屋台を囲むシデ棒＝２０１６年１０月１４日、姫路市白浜町　拡大

プラスチック製シートを使った祭り用のシデ棒。雨でも形が崩れず、耐久性も高い＝兵庫県福崎町福崎新（撮影・小林良多）　拡大

勇壮な屋台練りが繰り広げられる播磨の秋祭りに欠かせないアイテム「シデ棒」。屋台の周りに掲げたり、道路沿いに立てたりして祭りを鮮やかに彩るが、少子高齢化が進む中、このシデ棒を毎年作り直す余力がないという地域が増えてきた。ここに注目した地元企業が耐久性に優れたプラスチック製素材を相次いで開発、発売。担い手不足の波が押し寄せる祭りどころ・播磨の需要にピタリとはまり、浸透の気配を見せる。（井上太郎、井沢泰斗）

「華やかさだけでも残したい」。兵庫県姫路市南畝町（のうねんちょう）自治会の川島和博副会長（６９）は今年７月、プラ製シデ棒素材の購入に踏み切った。竹の先端に紙飾りを付けて毎年新調してきたが、若い世代が激減し、高齢の自治会役員では追いつかない。

販売するのは、姫路市に隣接する兵庫県福崎町にある文具店「くれよん」。シデ棒は早いところでは祭りの１カ月前から地区内に立てられるが、雨風に弱い紙製に代えて、色付きクリアファイルを加工する動きを知り、商品開発に乗り出した。

通常のクリアファイルは色が薄く、そのままでは製品化できないため、くれよんは、祭り用品を販売する近くの呉服店「志水京染店」と連携。地元印刷会社の協力も得て透明度が低く、退色しにくいポリプロピレンシートを採用し、この夏までに製品化に成功した。

この需要に注目する企業は既にあった。姫路市の紙卸売り「永井産業」は、紙のように折り目が付くポリエチレンフィルム「オリエチ」を使ったシデ棒素材を２月に発売した。オリエチは子会社の「旭パック」（同市）が食品包装用に開発したが、地元の祭りに参加する社員がシデ棒への転用を提案した。

特許出願中の自信作は「色はもちろん、振ったときの音も紙とたがわない」。昨秋に市内の十数町が試験導入すると、風合いや破れにくさが評判を呼んだ。旭パックの岡本浩志社長（４３）は「雨でシデ棒が台無しになるのは、播磨に共通する悩み。解決の一助になれば」と、力を込める。

志水京染店ＴＥＬ０７９０・２２・０３２２、永井産業ＴＥＬ０７９・２６３・３２５５

■伝統継承、時代に合わせ変化

担い手不足で多くの伝統行事が消滅の危機にひんする中、各地域は時代に合わせた負担軽減で持続を図る。伝統を変えることが衰退を招き、行事がついえた例も少なくないが、紙製に代わるプラスチック製のシデ棒素材が商品として成り立つほど、播磨に根づいた祭り文化のたくましさに、専門家も驚きを隠さない。

東京文化財研究所によると、みこしを担ぐのを諦めて神社の境内に飾ったり、担ぎ手を地域外からの派遣に頼ったりする「簡略化」を図ることで、祭りを残そうとする動きが全国で加速。一方で、小規模な行事を中心に消滅する例も増えている。

同研究所無形民俗文化財研究室の久保田裕道室長（５２）は「新しい試みは必ず賛否が分かれ、うまくいかないケースも多い」と話す。シデ棒の変化については「採算面で企業がよくやってくれたと思うが、そこに需要があるという地域の熱量が、事態を前向きに動かしているのでは」。

プラ製シデ棒を販売する呉服店「志水京染店」（兵庫県福崎町）の志水泰社長（３８）は「若者がローンを組み、目立つ色のまわしを買っていく。いい意味で、祭りには見えを切るのが播磨」とし、「『シデ棒は紙じゃないとあかん』との声はまだ根強いが、まずは知ってもらう活動に力を注ぐ」と話す。（井上太郎）